

がんばりまっしょい
リレーエッセイ

福岡大学病院 腫瘍・血液・感染症内科
高松 泰

福岡大学病院の高松です。2006年から骨髓腫患者の会福岡ブロック会に参加しています。私は1987年に九州大学医学部を卒業し、九州大学第一内科に入局しました。卒後1年目の臨床研修を九州大学病院第一内科、2年目を県立宮崎病院内科で行いましたが、どちらも血液内科が主力で、多数の血液疾患の治療に携わりました。3年目から九州大学第一内科の血液研究室に所属し、造血幹細胞移植の基礎研究と臨床に従事しました。

急性白血病は抗がん薬がよく効く疾患ですが、中途半端な治療ではその進行を抑えることはできません。強力な化学療法を行うと治癒が期待できますが、それに伴い重篤な副作用が出現し、治療中に感染症や出血で命を落とすことも稀ではありません。また強力な化学療法を行っても再発することがあります。この急性白血病の治療成績を向上させるために開発されたのが、自己造血幹細胞移植です。白血病再発を抑えるために大量の抗がん薬を投与し、最も問題な副作用である骨髓抑制を軽減するために自分の造血幹細胞をあらかじめ採取・保存し、大量化学療法後に輸注します。当時は全身麻酔下で採取した自分の骨髓細胞を用いる骨髓移植が主流でしたが、九州大学では原田実根先生が世界に先駆けて末梢血から造血幹細胞を採取する末梢血幹細胞移植に取り組みられました。末梢血幹細胞を効率よく採取する方法や、有効な移植前処置の開発に取り組みながら、数多くの自己末梢血幹細胞移植を行いました。急性骨髄性白血病にはそれなりの効果が得られましたが、急性リンパ性白血病に対する有用性は認められず、その後はHLA一致ドナーの細胞を移植する同種造血幹細胞移植に力を注ぎました。その自己末梢血幹細胞移植が多発性骨髓腫に対する世界標準の治療になるとは、当時は考えもしませんでした。

1993年から再び県立宮崎病院内科で診療に従事した後、1996年から豪州のアデレードにあるハンソン癌研究所にリサーチフェローとして留学しました。

造血幹細胞が骨髄に保持されているしくみや、G-CSF を投与すると造血幹細胞が骨髄から末梢血へ流出する機序に関する研究を行い、その過程で骨新生・吸収に関わる研究に携わりました。また週末には家族・友人とワインを飲みながらバーベキューを楽しみ、連休にはテントを持ってキャンプに出かけ、仕事も遊びも充実した 3 年間で過ごしました。その間に県立宮崎病院でお世話になった田村和夫先生が福岡大学内科学第一（現 腫瘍・血液・感染症内科）の教授に就任され、新しい教室作りに協力すべく 1999 年に帰国し、以後福岡大学で診療・教育・研究に従事しています。

福岡大学に勤めて 10 年以上経ちますが、その間に医療環境は大きく変わりました。診療内容に関しては、薬物療法で治癒は望めず同種移植の絶対的適応であった慢性骨髄性白血病に対してイマチニブが登場し、高血圧の治療のように毎日イマチニブを内服することで長期間通常の生活ができるようになりました。肺がんや胃がん、大腸がんなど抗がん薬が効かないと考えられていた固形がんに対して有効な薬剤が開発され、積極的に化学療法が行われるようになっていきます。診療体制に関しても、研修医制度や医局の改革、包括医療制度の導入、病院機能評価など、毎年のように目まぐるしく変化しています。2007 年 4 月に「がん対策基本法」が施行、2008 年 2 月に福岡大学病院が「地域がん診療連携拠点病院」に認定され、固形がんの化学療法に携わることが増えて来ました。今では担当している患者さんの半数は固形がんで、診療科の名称も「腫瘍・血液・感染症内科」で「腫瘍」が「血液」より先になりました。そのような状況のもとで、良質な抗がん薬治療を実践できる専門医の育成、治療成績を向上するための臨床研究を推進し、がん診療の質を高めることを目標に若い医局員と一緒に努力を重ねています。

学生時代はサッカーをしていました。昔は野球やラグビーが人気で、「キャプテン翼」が流行るまで日本ではマイナーなスポーツでした。その後 J リーグが設立され、男子日本代表がワールドカップに出場するようになり、なんと今年のはなでしこジャパンが世界一になりました。学生時代と比べると夢のようです。骨髄腫の治療も最近目覚ましく進歩しています。昔は患者さんに「骨髄腫と診断されても慌てて治療を始める必要はありません。プラトーに達したら治療を中断していいですよ。」と説明していました。このことは裏を返せば「早く治療

を開始しても、長く強く治療をしても治療成績を良くすることはできません。」
ということの意味します。それが今はサリドマイド、ボルテゾミブ、レナリド
ミドが登場し、強く治療すること、長く治療することの有用性が明らかになっ
て来ています。早く治療を開始すべきかどうかを調べる研究も進行中です。ま
た新規薬剤の開発・臨床試験も進んでおり、長生きすればするほど新たな治療
選択が増えると期待されます。もし皆さんの病状が再燃・進行しても、新規薬
剤を含めた抗がん薬、放射線療法、ビスホスホネート、症状を緩和する薬剤な
ど使用可能な全ての治療法を駆使して症状や病勢を抑え、粘り強く治療を行っ
ていきましょう。先行されても追いつき、引き離されても追いつき、そして最
後に勝利したなでしこジャパンのように。

取りとめのない話になりましたが、最後にアビスパ福岡が J1 に残留できるこ
とを願って（これは皆さんの骨髄腫に対する治療より格段に難しいかも知れま
せんが）筆を置きます。皆さんにとって明日もいい日でありますように。